

徳川齊昭と伊達宗城(七)

——嘉永二年及び同三年の往復書翰——

河 内 八 郎

嘉永二年の後半、十一月から、翌三年にかけての、伊達宗城と徳川齊昭との往復書翰である。その年三月十三日、水戸藩主徳川慶篤の三連枝(高松・守山・常陸府中)後見体制が解かれ、齊昭の藩政関与が再開された。齊昭の雪冤運動は、藩内の各層によって続けられていたが、しかし、その一方でそれより先、水戸藩家老はじめ「政職有司」は齊昭の復活に反対し、彼が再び「世に出る」ことのないよう、幕府に訴えていた。齊昭の復権がともかくも実現したことは、このような水戸藩内の対立の中においてであつたし、それによって、その対立は、更に強く、深いものになつていったと考えるべきであらう。

雪冤にあたつて、阿部正弘以下五人の老中は、齊昭に書を与え、「執法の向々、仮令奸人と被思召候共、御推察迄ニ而容易に御罰し被成候義ハ却而不穩、……兎角派党を被立候御処置有之候而ハ、始終一和之期ハ有御座間敷、……幾重にも公平之御処置御急務にて……」と、互いに対立者を処罰することをくり返して来た藩内の「派党対立」を厳しく批判しており、一方齊昭も、老中らに対して種々弁明をくり返すが、その後の事態は、一向に好転していない。

右の三月十三日付の「老中連署沙汰書」の写しは、前号五九(1)のように、斉昭から伊達宗城に送られ、右に引用した部分などに、わざ／＼斉昭が傍点などを附しているのは、御三家として、又大藩として、天下国家の政務に責任の果せなくなっている事態に、とくに幕府上層部から与えられた厳しい批判に対する、彼の苦悩を物語るものではなからうか。同じく五九(3)の、伊達宗紀書翰への斉昭の添書も、そのような立場を反映するものといえよう。

さて斉昭の復権後の動きであるが、閏四月二日の、斉昭から五老中へ宛てた書状によれば、藩治回復の緊要策として先ずとられたことは、結局、反対派の「転職」であった。斉昭謹慎中に、年少の慶篤を支え、三連枝にとり入っていた、国勤の執政興津藏人良恭と、参政内藤藤一郎業昌をまず斥けることが、斉昭―慶篤父子の隔離を解消し、熟和を計らせ、「藩内統一」のために必須の策と考えられたのであった。以下、斉昭のおこなった「処分」を見ると、次のような結果となっている。

附家老中山備後守信守は、内藤らの言いなりになっていただけであるから、内藤の転役によって、「父子一和」を妨げるようなことはなくなる。国勤の城代家老鈴木石見守重矩は、斉昭の藩政関与は好まないであろうが、家老の内第三の家筋でもあり、やはり内藤の排除で、格別の「害」はなさぬようになるであろう。江戸勤番頭家老太田丹波守資春は、人材では無く、そのままでも無害の人物である。若年寄から表家老となった朝比奈弥太郎泰尚は、鈴木石見とともに斉昭の復活を好まない仲間であるが、内藤とも縁者である立場がそれを支えているので、内藤の転勤によって、「父子和熟」に妨害はなくなるであろう。国勤の表家老興津藏人良恭は、結城寅寺によって、三連枝に第一に推挙された人物で、辰(弘化元)年以来専ら権をほしいままにし、「源威(初代頼房)以来例も無之事等取行」ってきた者であるから、この者は絶対に排除しなければならない。国勤家老伊藤玄蕃友竹は、代々家老の家柄であるが、寺社奉行から用聞家老になったばかりであるから、特にとりたてて問題にすることはない。以上六名のうち、他の五氏は

旧來の家柄でもあるからともかく、興津藏人のみは、興津能登守克広家の分家にすぎず、親の代から始まって、年寄役に取立てられたものである、として斉昭は強く、排除を主張したのである。

その他、若年寄クラスの役人として、国勤の天野伊豆景寿、同じく寺社奉行岡部忠平以親、同じく側用人遠山龍介重寛、今村喜左衛門孝則の五人は、「指当り無害」であるが、内藤のみは興津と同一の理由で、何としても排除する、としている。内藤藤一郎（前号五八参照）は斉昭の退隱後、三連枝へ特にとり入り、讃岐守（高松、松平頼胤）に足繁く出入りして、側用人から若年寄になり、禄を倍増した。若年寄とは、格別の権威もない役職であるが、「連枝を手一盃に致し置き候故、殊之外権勢強く、在江戸役人之内、備後（中山）始よりも藤一郎（内藤）を恐れ候義」は、家中で知らぬところのないくらいである。加えて、国勤であった縁者の朝比奈弥太郎が江戸勤となつてから、奥右筆組頭とも結び、家老備後（中山）、丹波（太田）も「有か無しの姿」であつた、としている。

斉昭の謹慎中に「奸派」によつて握られた水戸藩政の「建直し」には、ともかくも興津・内藤の二名を除くことによつて事が済む、とした判断は、「派党対立」に内外の非難が高まる中で、斉昭の「妥協」の産物とも考えられよう。このような、斉昭の「弁明」申立てに対して、老中阿部正弘は、五月三日、中山備後守信守と、太田丹波守資春を呼び、斉昭との十分な協議をすゝめる一方、興津・内藤の「外転」と、「国事」にかかわる犯罪人、つまり藩内の反対派の処分を、寛かにするよう求めた。斉昭の意を体していた中山・太田は、「藩政協議」の件は応諾したものの、後の二件は老中の忠告を拒否した。阿部は、斉昭宛の七月十六日の書状で、興津・内藤のこれまでの態度はあくまでも「疑惑」として述べられているので、「罪科」の「ケ条」が一つ一つ書き上げられるまでは「寛大」に処置しておくべきである、と説き、「憎しみ」によつて対立派を処罰することを強くいましめている。

八月九日、斉昭は再び阿部老中に「弁明書」をおくり、さらに十一月十六日にも、三度び、興津・内藤の転役の実

現に許可を求めている。嘉永二年三月の斉昭の「有免」が、直ちに彼の復権と、いわゆる斉昭派による藩政主導権の奪回になり得ず、幕府との間にもその溝を深めていく事態は、更に嘉永三年から四年まで続いてく。それは一方で藩内の対立の一層の深刻化を意味するものでもあった。

前号に続く、嘉永二年の末から三年にかけての、今号の書翰は、そのような状況の中で書かれている。なお、その時期の、斉昭と阿部老中とのやりとりは、「新伊勢物語」(『茨城県史料 幕末編Ⅰ』所収)の「四」(『同』二〇一頁以下)及び、それを引いている『水戸藩史料別記』卷二十七(『水戸藩史料 別記下』)にくわしい。

七〇、嘉永二年十一月二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

＊『事修叢書 九下』所収、但し、宇和島伊達文化保存会所蔵写本による。

「十一月二日」付なるも、『藍山公記 卷二十』嘉永二年十二月二日条所収

乍恐又々御請奉申上候

尊教被成下置候儀難有奉拝見候、其本乱候始末誠ニ驚入恐歎仕候、右様儀ニ而ハ中々奉行共より申立候儀、急にハ評議無之筈之事ニ奉存候、此節当所ニ而御新造之バッテラ形御舟、於浜御庭^② 御内覽茂可有之哉ニ而、江戸海廻し方之儀被 仰越候、付而は兼而丹塗に仕立有之候処、右ニ而は不宜候間、塗削取候様、閣より内意ニ有之候、図面仕様帳ニ而伺済之上、造立相成候ヲ、又々削取候様相成、何か不都合之事ニ奉存候処、全四五閣より塗候而は異船に紛敷なと申候儀と 尊教之趣ニ而奉悟候、且又当時之世中奉察候処、政務之臣之内専ら勘ノ権威増長仕、閣之権薄く、何事も勘次第と申様ニ有之、既に一二閣^④なとハ勘之不宜ハ不承知、夫ヲ取示候儀出来不申、扨々苦々敷事ニ奉存候、天下之政臣右様之始末に而は下ニ至り候迄治り申間敷、何共恐入候儀に奉存候、当所之御手薄も、全勘之御入費相拒候故、

何事茂夫也ニ相成居申候、御台場御備筒十八挺有之候得共、玉葉ハ一挺ニ付只七放九放に限り申候、西洋ニ而ハ一挺に晝夜五十放ツ、十日之貯有之候、左候得ハ一挺五百放之手当ニ有之候、御手薄ニも余り之事に奉存候間、着早々奉行江申聞、年々御貯玉葉料として少茂三百両茂御下ケ相成候様申聞候処、不取敢奉行より申立候処、夫は去月廿二日申立候通り、年々三百拾両ツ、御下ケ被成候様相成申候、其外之儀は未一向御差図無之候、扱々心痛仕候儀奉存候、只今姿ニ而、若萬一之儀御座候ハ、当所ニ而討死ハ不仕、極不忠之両勤之首を打取候而討死仕候心得ニ御座候、乍併兎角打拂之儀、拒候者多く御座候由、若々交易なと申様相成候而は、乍恐 神祖之御武徳を相穢候様に奉存候、何之為に数代祿を頂戴仕候哉、広大之御恩徳ヲ乍請、命を惜ミ、錦繡に被包、風月之樂を思ひ、一時逃之策而已申候而、當時清国之近き例に不心付候人々ハ、蛮異より可怖人物に有之候、御備さへ相立候ハ、異国に可懼事は少茂無御座、畢竟御手薄故、彼是人々恐怖仕候、當時は国主より茂海防之儀を深く御案し申上、種々申上候様子ニ御座候処、一向御取用ニ相成候儀も無之哉ニ奉存候、 帝王永世將軍ハなと申族茂、末ニハ出来も可仕哉と、是も亦深く愁候儀ニ奉存候、寝ても覺ても只々御案申上候は、大君之事ニ奉存候、如何成ハ奸臣相集り、時之權を得候哉、日月茂時之勢にハ不勝者ニ御座候哉、只此上之御模様沈案仕候より外無御座候、可歎可悲只々深く奉恐入候

奉

恐惶、又之御請申上候

十一月二日

海岸之図之儀奉畏候、幸写取所持仕候、尤大図ニ御座候間、帰府之上可奉獻呈、帰府も十二三日比に多分相成申候、当所様子伊予入道江目話可申候、猶同人より委敷可奉入尊聴候

① 本誌前号(第十五号)「五八」の内容にかゝること

② 宇和島城下の西南部海辺を埋立てて、寛文十二(一六七二)年、第二代宗利(明暦三一一六五七年襲封)の代に設けられた

徳川斉昭と伊達宗城(出)——河内

別邸。のち第七代宗紀(春山)によって、文久二(一八六二)年から大改造され、隠居所潜淵館と、庭園天赦園がつくられる。

③「勘」＝「奸」派

④一二閣＝「五八」註①

内容 一、水戸藩内の「乱れ」＝対立を案ず、斉昭派諸士の復権の進まざることなど。(斉昭は内藤藤一郎らの処分につき阿部の助言を求めている。)

一、宇和島浜御殿にて新造のバッテラ船、江戸海廻しを命ぜらる。塗色の指示に混乱あり

一、当時の政務の混乱、一・二閣(阿部・牧野か)の指導力も不十分

一、台場砲台に玉薬不十分なり

一、「打拂令」復活には反対の者が多いが、それも案じられる。交易よりも海防強化が第一
一、宇和島より帰府の出立は、十一月十二、三日にならん

七一、(参考書翰) 嘉永二年十一月六日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

*『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷二十』 嘉永二年十一月六日条所収

別紙乍恐奉謹呈候、過日下曾根金三郎へ相伝候所、重々難有奉存候、猶又再度御請書奉謹呈度相頼候間奉呈上候、且又過日 尊館へ 御立寄御座候而、萬事御首尾も宜敷段、金三郎奉伺、乍恐難有義、同人も奉存候、右御悦不苦候得ハ、従私奉言上候様申聞候間、此段奉申上候

一、海防之義も、何より此節風説ニハ、打拂ニ相成候御模様と申事ニ御座候、如何御座候哉、勿論左様不相成候而ハ相成申間敷事ニ奉存候、弥左様相成候得は、一段此上自国場所々々御備も嚴重ニ被遊候様ニ無之而ハ、只打拂而已ニて、夫々重場所々々御備御手薄ニ而ハ無益事ニ乍恐奉存上候事ニ御座候、此節は近在ニ盗数人有之由、甲州・駿

州辺ニ而も乱妨致し候由、是召捕ニハ可相成候得共、江府近在右様之悪者徘徊仕候事、御威光之衰微と恐入奉存候、左様之悪者武州近辺可近付筋ニ無之と奉存候所、恐入候事多、何卒一刻も早く武威嚴ニ相成候様有之度事ニ乍恐奉存候、先ハ此段奉言上度、内々申上候、恐々頓謹言

十一月六日

藤 宗紀

閣下拜上

内容 一、下曾根金三郎への配慮を謝す

一、「打拂令」復活との風説は可なるも、各々自分領地の備の強化が不可欠なり

一、江戸近在の治安も乱る、対策を望む

七二、嘉永二年十一月二十三日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

・『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

「仲冬念二」とあり、『藍山公記 卷二十』嘉永二年十一月二十二日条所収

捧呈密楮仕候、追日寒威猛烈罷成候処、先以 台下倍被遊御揃、御機嫌能被為涉候半、乍恐萬福奉大賀、難有安心奉申上候、扱又其後ハ不奉伺 御機嫌、背本意多罪々々恐縮之至奉存候、毎度野父御投書被成下候節ハ、蒙 御加毫恐入奉萬謝候、扱又先頃は 御守殿へ 御立寄被為在候処、萬端御都合宜敷被為済候趣奉伺、誠に恐賀之至奉存候、緩々御滞在被為在候由伝承仕候、定而御寛話も可被為在、於愚夫輩も難有御儀難盡于筆端奉存候、弥余がん水解萬端御開運の儀御坐候半、追々御施為も可被為在候哉、乍憚御床敷奉存上候ニ付、相同道奉存候、港説に而伝承仕候得ハ、当春松安芸守方御住居へ被為成候節ハ、還御時分御醺氣被為在候由候処、此度ハ還御手間取候処、御酒氣も不被為在候由、左候ハ、種々御緩話坏ニ而被為在候事歟と竊に難有奉存候、要石御舞曲坏被遊候御儀哉、奉相同道候、先々至

極之御都合被為濟、吳々奉遙賀候

一、先頃御教示被成下候、伊勢守より諸役人中へ存慮相尋候、修一条之義、其後 御新令可相發やと奉渴望候処、今日迄為何儀も不相伺 深謀遠慮より發候儀ニも無御座、其後ハ帆影も不相見候間、亦苟安如眠相成候儀かと不堪悲憤寒心仕候、此度ハ海岸淺深巨細に御尋被 仰出、拟々面倒なる儀、乍恐無用に手数相懸候而已にて、何之御裨益にも相成申間敷、如何様四周之海岸細密に御達申上候とも、各国防禦之手当無御座候而は御安心可相成儀と不奉存候、何ぞ測量差上候ハ、其上にてどこ／＼炮台設候様被仰出候儀にも候や、左様相成候而ハ淺深而已を以御差図ニ相成候間、山海之形勢射撃之利不利も不相盡様相成、且ハ天下之海浜広莫之儀ニ付、御繁雜にも有之事と奉存候、只今海岸之御吟味御坐候より、別に御処置被為在度儀ニ奉存候、何分主意難奉解、何等被為聞候御儀被遊御坐候ハ、相伺候奉存候、浦港も過日下きんより一封差越申候処、兼而見聞仕候通、内実ハ一向御手薄の趣御坐候、御手元ニ而右様虚飾被為在候而ハ、諸藩より取繕申出候とも被遊方有御坐間敷奉存候、先は右等之儀申上奉り度、恐惶、頓首百拝

仲冬念三

敬白、寒力日募候候、乍憚御保愛被為在度奉遙祈候、関東辺今程飛雪紛々沍寒甚敷御坐候半、南海僻地も当今ハ珍敷、連日飛雪、昼も四十三度より昇不申位に御坐候、將両人共無異潛居仕候間、被遊御安意度奉希候、野生儀も碌々瓦全罷在候故、恐入候得共、御擲念奉願候、乍不及憤勵仕居申候、此度十二封度、三十封度カルロン鑄造仕、不日力ためし仕、早春試放可仕と相樂居申候、飛雪中刺撃両枝抔仕合為仕、檢閱抔仕候処、又一興に相成候様奉存候、何を申候而も、浅学愚昧者不行届儀而已にて恥入奉申上候、此頃ハ痘少々流行、専ら種痘為仕処少々得意之光景皆々無難に相済申、何分僻地山奥ハ開け遅ク、別而固陋一偏にて当惑仕候、無用冗雜之儀入 御聴奉恐入候、

恐々謹言

宗 城 頓首百拜

密奏謹呈

① 宗城養父伊達宗紀（春山）

② 松（平）安芸守Ⅱ広島藩淺野齊肅か

③ 老中阿部正弘より嘉永二年五月五日に出された、「打拂令」についての諮問（前号「六八（3）」）

内容 一、義父宗紀との文通、親懇等を悦ぶ

一、齊昭の御守殿（生母峯寿院）訪問を慶す

一、阿部老中よりの諮問（「六八（3）」）後、「打拂令」につき何の処置もなし

一、今回の海岸調査の違

一、先の下曾根金三郎（下きん）上書（「六七（2）」）の通り、浦賀は依然として手薄なり

一、カルロン砲鑄造、試発を楽しみに待つ

一、痘瘡流行、種痘は僻地故理解する者少し

七三、嘉永二年十二月十三日 伊達宗城書翰、徳川齊昭宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷二十』嘉永二年十二月十三日条所収

別紙奉申上候、御文箱拜領之儀申上候処、御聞届被成下被下置候間、右様器にても事済候故、数々拵、同志の者へ可遣旨被仰出候趣、折角私儀も右の処感服仕候間、奉願候儀にて早速藪之竹にて為拵可申、此一器に限候事にハ無御坐、右にて万器ニ及候儀重々難有御教示奉感服候

○此頃大銃御鑄造之儀ニ付云々被仰出奉畏候、乍写堀出もの義伝承不仕候処、扱々残念の義御坐候、井上・田付にて^①

六十余、下曾禰にて四十位出来候様子に御坐候、半途ニ而やみ候而ハ扱々遺憾之至奉存候、今日も下曾禰参会承可申、もしや浦賀砲台やみ候故、御筒もやめに相成候事かと奉存候、尚又御聞込も被為在候ハ、相同道奉存候、恐惶頓首

十二月十三日

宗城

① 井上Ⅱ幕府鉄砲方井上左太夫、田付Ⅱ同田付四郎兵衛、天保十四年以来同役に任じ、弘化年間以降、大砲鑄造にあたらせる。

内容 一、文箱拝領の礼、自分も作り、同志へ配らん

一、大砲鑄造は、井上及び田付にて六〇、下曾根金三郎にて四〇で中断、不進捗をうれう

七四、(参考書翰) 嘉永二年十二月十六日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し同前

『藍山公記 卷二十』嘉永二年十二月十六日条所収

御別紙謹而奉拝見候、愚息へ 尊書相伝候様蒙 仰、早速相伝へ難有奉存候、自当人御請可奉申上候、且又山田三郎義は無事有之哉、其外蒙 仰候趣奉謹承候、三郎義無事消光仕候様子ニ御坐候、兼而被 仰下候趣も御坐候間、松家之善不善人之義も内密相尋奉言上ベクと心懸候処、三郎義暇前と暇後両度拙家へ参候而已ニ而、其後何レへ蟄し候哉、何分住居難取極故、急々相尋候得共、何分耽と相分兼候得共、此節かゝり出来候間、追々相尋、兼而蒙 仰候義も相分次第可奉言上と奉存候、段々及遅々甚恐入候得共、三郎義も松家奸人の方へ相知候而ハ餘り不宜義ヲ相察候故歟、拙家へも其後絶て不罷越、又従私方も餘り近敷仕候も、又松家杯之目ニ附、却而同人為ニも不可然と奉存候間、尋も不仕、其内兼而御尋之一条も御坐候間、色々相尋漸少々手かゝり奉出来候間、追々密ニ相尋候上相分り候ハ、是より可奉言上候、如 尊諭当時ハ兎角何国も正忠之者ハ不通之世の中と相成候、此節何等珍事承り候ハ、可奉申上候処、

何れも不承只々兎角衰世と相見へ、海岸備も其後御沙汰相やみ、寝入候様奉存候、山田三郎之事段々及延引恐入候、餘り是も顯然と仕候而ハ何歟当人不為と密々ニ相尋候間、大ニ延引相成候、分り次第従是可奉申上候、段々延引之段ハ御高免奉希上候、恐々頓首

十二月十六日

御別紙尊答

侍史中

- ① 山田三郎「第十三号」「四三」に登場、第十四号「五六（2）」註②も同様か
② 松「松前家、嘉永二年六月九日昌広致仕、弟崇広襲封

内容 一、山田三郎の近況如何、松前家の状況報知及び同家への働きかけの首尾如何
一、同人、最近接触なし

七五、嘉永二年十二月二十二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷二十』嘉永二年十二月二十二日所収

拜呈仕候、過日ハ入道へ尊書被下置候ニ付、御密封被相下、難有拜見申上候、倍御安泰被為涉重疊奉大賀候、然水こし之義ニ付、ア閣へ周旋仕候義少々申上候得ハ、拙家之不為ニ相成候ハ不宜候間、微身ニかゝり不申様可仕旨、萬續御懇篤御教示被成下、重疊難有恐入奉存候、右之段ハ何卒不被為在御配慮様、伏而希上候儀御坐候、忠臣孝子ハ日光を拝候義も不相叶、かんの手先にて預居候故、御服の処如何有之へきやと御配慮被遊候段、乍憚御同情苦心此事に奉存候、乍然得天幸候間迄ハ無異罷仕候儀も又難有ものと奉存候、実（たゞ）れん文ハ一日も早く除度事と乍憚苦心罷在申候、

宝永之頃、賢明之頃ニハ、源義公御退隱、忠臣ニハ毒害ニ相成も彼是全宝時之例歟と被恩召候由相伺候而ハ、毛骨竦然仕候儀御坐候、可歎可懼世の中ニ御坐候、乍然正ハ正、邪ハ邪ト永世迄も相分り候事故、一時之浮雲何とか仕候ハ、拂除出来そふなもの奉存候

一、御口復之御用心並尊体御保養可奉申上候處、被為在御承知候段、本望奉存候、尊体御養生ハ被相盡候旨、無此上難有奉存候、乍憚一世の安危に係り候御身分、重々御大切に被為在候間、此上にも御保護相願候、御口腹の御儀ハ小石川へ被為入候節ハ、御守殿にて御側仕立にて被進候間、御安心ニ御座候由、尤御膳御取分、其外御側にて出来候儀も機密之御儀御坐候由、段々御委敷相伺難有安心申上奉り候、実ニ御親敷御誠実之御間柄感涙仕候御儀御座候、外々之御住居ハ迺も左様御都合トハ是迄の處承知不仕、立派の御客様申様に御座候、霄壤之御儀御座候、有栖川宮御息女御養女にて御縁談可被 仰出旨御内々御沙汰の趣、極密御別紙にて拜見、扱々御重縁と奉申、無此上御都合と、其処ハ奉大賀へき御儀御坐候、乍然 尊慮の通、御守殿二ツと申而ハ如何に御大家に被為在候と申而ハ御閨宮之御費用莫大の御儀と奉存候、如何計の御配慮可被為在候半、其上貴賤共に婦人ハ多人数より集候程面倒なるもの、御双方様ニも上ハ御和睦被為在候而ハ、下々ハ多擾之義と奉存候得ハ、幾久敷御繁昌被為在候内にハ種々御配慮ハ可被為在と恐察申上候、乍憚拙家にてても大膽大夫妻儀も不遠為引越候含御坐候處、三夫婦と相成、各別住居ニ仕候得ハ小内面倒筋ハ薄く可相成候得共、自然と疎遠に相成、加之三竈に相成候得ハ、それ〳〵構も相応ニ相付候事故、費用も相嵩み候間、住居続ニ建繼位にて為相濟候心得に御座候得共、段々附の婦女も多く相成、種々面倒ノ筋可相生、中々愚昧の私杯にハ齊治も行届兼候半と心配罷在申候處、丁度御内密にニ御守殿の儀奉伺、中々御大造の儀、一小家の可奉企比儀ニハ無御坐候得共、さぞ〳〵永久を御遠慮被為在候而ハ、御配慮も不少御儀と奉深察候、乍然、右躰被仰出候も、天気晴かゝり候故歟と難有奉存候

一、先便も被仰下候北地之儀、大叔父為告候云々、今日迄も何たる御沙汰も無御座候、明日ア閣へ逢候間、さくり見候半と奉存候、扱々不安心千萬之事奉存候、先ハ右等之儀奉申上、恐々百拝

臘月念二

敬白、此間ハ入道へ御念書、殊に安鯉沢山被下置、私儀も拝味仕候処、別段之好風味ニ而、殊の外難有狩り奉り候儀御坐候、扱又此勝男ぶし、弊邑産にて、迎も御上りニハ相成間敷候得共、御側向にて何そ被仰付候御儀も可被為在やと奉存候故、奉入貴覽候、此菓ハ唐久年母^{七ツ御}、じやんば^{三ツ御}と相唱^{南嶼}方言、甚々如何敷ハ奉存候得共、此節弊邑より取越候間、奉入貴覽候、北国筋にハ無御坐様承知仕候、御叱留被成下候ハ、本望之至奉存候、別紙ニも奉申上候通り、鶴肉ハ御用次第被仰出候ハ、可奉皇上、尤かす漬ハ當時不在、みそ漬に御坐候、此段奉申上候、以上

宗 城

① 前出「七三」の宗紀書翰冒頭部参照

② 水こし水越、水野越前守忠邦、弘化元・六・二十一老中再任、嘉永元・五・三免

③ 有栖川宮息女ニ有栖川宮職仁親王女、線宮、徳川慶篤との縁談あり、嘉永三年十一月二十三日、將軍家慶婚約を許す。
④ 大膳大夫ニ宇和島藩世子、宗徳。宗紀実子、宗城義弟、夫人秀は、富島元起女

内容 一、水野越前の処置につき、阿部老中（ア閣）へ周旋依頼、その先の処置につき助言を乞う

一、慶篤と有栖川宮女との縁談を悦ぶも、種々の配慮を案ず

一、伊達家でも、何れは宗徳の縁談、三代夫婦揃いの生活の問題

一、北方（松前家）のこと、成行を案ず

一、松前藩主崇広祖父草広（文化四年永蟄居）弟広当（広純）の処置、第十四号「四五」など

一、あんこうの礼状、名産品のやりとり、菓子を送付等

嘉永三年

七六、嘉永三年正月五日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『(御書留) 嘉永庚戌(嘉永三年)』所収「越前・土浦・宇和島・尾張・一橋等々関係書翰留」、水戸彰考館所蔵、第三一号ノ六敬白、追日寒氣増加之候、尊躰伏而千萬御保護奉祈候、扱又、乍輕微、鶴一翼奉呈笑覽度、尤海運ニ付、少遅延可仕、此段御有恕奉希上候、恐々百拝

謹而拙贖拜呈仕候、鳳曆之御吉慶不可有尽限御坐候奉存候、閣下倍被為揃、御機嫌能被遊御超歳、如御嘉例坏可被為済、恐賀無量萬福奉南山候、先者右御祝儀乍憚奉申上度、如此御坐候、誠恐謹言、頓首拝觀

孟陬初五

伊達遠江守

名前

水府明公閣下

侍史披露

内容 一、鶴一羽を贈る

一、年始状

七七、嘉永三年正月二十六日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『事修叢書 九下』所収、但し字和島伊達文化保存会所蔵写本による

(1)・(2)とも『藍山公記 卷二十一』嘉永三年正月二十六日条所収

(1)

過日者不存寄御懇章被成下、難有奉謹誦候、春寒之候、閣下倍御清適被為在、萬福奉大賀候、宰相賢君にも愈

御順快被為在候段奉承知、無此上御儀、如何計か御安康可被為入と奉賀候、扱又旧冬借仕候海上炮術全書一函謹而送呈仕候、以御蔭校合仕、難有仕合奉存候、遠西^②之方ハ今少延遷候段、御海恕奉希候、奉申上度心事如富岳御座候得共、追而申上奉り候半、先ハ此間之御請申上度、密事ハ別紙にて奉申上候、恐惶謹言

孟春念六

敬再白、春寒之候、乍憚 尊躰為天下御保護被為在度奉希候、乍恐愚父よりも奉伺 御機嫌度申上候、頓首百拜

宗城百拜

水府明公閣下

侍史中

① 「海上炮術全書」= Zee-Artillerie 前号「六一」註② ② 「遠西」= 第十一号「二三(2)」の「遠西海浜裁判考」か

内容 一、宰相賢君(中納言慶篤)の病氣回復を祝す

一、旧冬借覧の「海上炮術全書」、校合済み、返送す、謝辭

一、「密事」は別紙

(2) 別紙

御別紙奉拜見候、異船之義御届申上候中ニ 寛政二五年松の庄内云々、同二十年春琉球之大船云々

右之通御座候處、寛政之政と寛永之永と書誤ニ可有御座やと被思召候得共、尚申上候様、右ハ如 尊命寛永年中之儀

に御座候、且弊邑海岸図并浅深書、御届仕候、図御覽被為在度由、容易之御儀に御座候得共、殊の外大図面ハ畳敷位も御座候間、差出候都合甚心配仕候、尤折候而ハ左程にも無御座候故、家来へハ内密ニ而可入密覽と奉存候、尤少御猶予奉希候、尊君之御儀、決而秘密に仕候訳ニハ無御座候間、左様奉希候、頓首百拜

① 「異船之義御届」= 未詳なるも、異国船来泊の記録調査か

② 寛政二（一七九〇）年^Ⅱ庚戌、寛永二（一六二五）年^Ⅱ乙丑、「寛政」に「二十年」は無い。

内容 一、「異船之義御届」の年号の書き違いの指摘は、その通りなり

一、大型の宇和島領海岸図を秘かに呈覧に供す

七八、嘉永三年二月 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

*『御書留』 嘉永庚戌』所収、同前

敬白、時下春寒未退之、乍憚為天下 尊体御保護被為在候様奉遙祈候、東都追々春光可相催惣像仕候、南海ハ春来大ニ暖和相成申候様奉存候、^①将又、甚微少愈惠奉恐入候得共、領海之鰯一喉、御祝儀申上候驗迄ニ進献仕候、御叱留被成候ハ、幸甚之至ニ奉存候、尤海運ニ仕候間、遅延にも可相成や、其段ハ御仁恕奉希上候、恐々謹言如教、新正無期申納候、愈御多祥被致加年、令欣喜候、扱旧冬は御手簡并鶴御投惠、今春も御贈品数度、深意令感佩候、両度之希謝如此候也

二月

水戸隠士

伊達殿

参

尚々、山河相隔候処、御廻状承領慰懷之至、幸に時氣御厭可被成候、不二

① 伊達宗城は、嘉永二年閏四月五日宇和島着、同三年三月三日同地発、参勤、四月七日江戸着。従って、この書翰の時は、在国中（『藍山公伝記』による）、次の「七九（一）」参照

内容 一、水戸領海産の鯛を贈る

一、旧冬の書翰及び鶴の惠贈を謝す（正月五日付、「七六」）

七九、嘉永三年二月二十二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

(1)・(2)とも、『藍山公記 卷二十一』嘉永三年二月二十二日条所収

(1)

旧臘望発之尊翰、過日相達、雖有奉謹読候、春暖追日相催候御坐候処、先以 閣下被為揃御多祥御安泰被為在候条、乍憚大賀無量奉南候、^(山脱カ)旧冬中ハ御手痛御十分に不被為在由相伺、乍憚奉氣支候、何卒御加療專要望祈仕候、春暖可相催候ハ、御甘治可被為在哉、御保護御大切と奉存候、不絶御運動被為在度奉存候、将又不存寄結構之御品御恵被成下、毎度御懇篤之御儀、恐入難有仕合奉萬謝候、又追々進呈仕候拙楮御披閱被成下候由、御委曲被仰下難有謹承仕候、僉品進獻仕候処、御満足之旨被仰聞、恐縮之至奉存候、先ハ右再度奉報申上度、如斯御坐候、恐惶謹言

仲春廿二日

御端文難有奉拝閱候、不順候、乍憚 尊躰御保護專一奉存候、末毫乍失敬、宰相賢公へも伺御機嫌度、可然奉願候、愚僕儀為東上来月三日出船仕候、尚又出府後萬可奉申上と奉存候、恐々謹言

遠江守百拜

景山明公閣下

侍史中拝呈

内容 一、前年十二月十五日斉昭書状(所見なし)への返書

一、斉昭の手痛見舞

一、贈答品へ感謝、又、礼状に恐縮

一、来月(三月)三日出船、出府発途の予定なり(「七八」註①参照)

徳川斉昭と伊達宗城(代)——河内

(2) 別紙

御別紙謹閱仕候、十年計以前 御工夫被為在候神発流太刀帶、御在國中常々被為帶又御着具之節も御用に相成候処、御便利も宜敷被 思召候間、御恵投被成下候由、御品柄と申、殊ニ 思召被為付候御製作ニ而、別て重畳難有仕合、幾久敷重宝可相用、御芳慮之程感荷之至御礼難盡于毫楮奉存候、尤右御品未相達候間、先ハ御礼申上置候儀ニ御坐候、追々家僕より可差越候間、早速旅中相用、調法可仕候、深々難有奉存候、先ハ御厚礼申上度奉報旁申上候、恐惶頓首

仲春廿二日

御別帛奉報

① 神発流は斉昭の創出になる大小銃砲の術、第十一号「八(2)」註⑤参照
内容 一、斉昭自ら着用して利便と自慢の太刀帯の贈与を謝す。早速、参府の旅中に用いん。

八〇、(参考書翰) 嘉永三年二月二十五日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

* 『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷二十一』嘉永三年二月二十五日条所載

以別紙奉言上候、過日ハ御内密之 尊書奉謹読候、委曲被 仰出候趣、具ニ奉拝承候、如何にも当時御不安心奉存上候処より、愚意ノ旨奉言上候所、乍恐今度被 仰出候通、二三輩愚意閑老衆へ申達候テモ御取用之程ハ千萬無覺束、夫而已ナラス、却テ蒙 御不興候様相至候而も甚以不本意、猶又は篤思慮仕候半と 尊慮之趣難有奉謹承候、誠ニ時勢ト申物ニ可有之哉、重々恐入候御時勢と乍憚奉存候

一、南部当主ノ義は、文武人ニ相成候様被遊旨奉謹承候、何卒相励ミ、以来追々ニハ志憤発仕、国家へ志厚相成候様、

乍不及愚息へも申聞、相励シ可申、当南部ハ前退身ノ仁よりハ世才ハ有之由に承り、愚息ハ度々別懇仕候間、承り申候。

一、浦賀ノ御備モ少々ハ出来候様可相成候得共、如只今ニテハ暮々モ御手薄、乍恐相考候テハ不安心至極と奉存候、且亦尊書早速御調筆被成下奉謹謝候、下曾根へモ此間對話仕、兼而相願候間、差遣候間、此段奉言上候、重々難有事奉拜謝候、先ハ此段申上奉り候、恐惶頓首、謹言

○長英、此節江戸ニ参候由之處、又立去、當時ハ居不申由ニ御坐候、此節何ぞ珍説承候ハ、可申上と奉存候所、何分可申上事無之、火事ニテ其虚ニ乗し、物価増長一同武家難渋仕候、余程大工ヲ始メ利潤ヲ得候様子、悪キモノニ奉存候、已上

別紙拜呈御請

① 前号「六八(1)・(2)・(3)」嘉永二年十月一日付宗紀書翰に對して、斉昭が出した返書(所見なし)に對する、宗紀の返書と思われる。

② 南部当主盛岡藩主南部美濃守利剛、嘉永二年九月二十六日致仕した甲斐守利義の跡を継ぐ。

③ 高野長英は、嘉永二年正月には宇和島を離れ、九州まで、各地をまわり、同年八月に江戸へ戻ったとされている。その時に顔面に変容を加えたというが、この年嘉永三年正月、江戸から姿を消し、下総国香取郡下に潜むが、三月には又江戸に戻り、沢三伯、又は佐伯三伯と名のつて、青山百人町で医業を営み、十月晦日の逮捕自刃に至るわけである。なお、前号「六九」に紹介した「砲場土図」は、彼が宇和島滞在中に翻訳した『職家必読』(原書 G. J. Stieltjes: Handleiding tot de kennis der Verschillende soorten van batterijen, Breda, 1832, 「各種砲台構築教範」)の、ある附図の説明文か、その訳述草稿の一部であろうかと考えたが、『高野長英全集』第四卷(雜書)の「補遺」に(同書補遺二七・二九頁)、鈴木讓所蔵の長英真蹟で、宇和島滞在中に、彼が建設した御庄久良(みしろう・くら、現南宇和郡御荘町)の砲台設計図と思われる、として、兵頭賢一氏の謄写に基いて載せているものと同一である。その原本が、宇和島伊達家へ入ったものであろう。前号「六九」の解説に修正と、附加をした。

内容

- 一、海防問題について「愚意」を閣老衆に申し述べても、取上げられざるべし
- 一、南部家当主（利剛）は有能人であり、先代よりも世才あり、宗城とも接触あり
- 一、浦賀防備は、やや進むも、やはり手薄で不安なり、下曾根金三郎ともその件で対話す
- 一、高野長英、江戸に戻り、又立去るという
- 一、此節は、火事あり、物価高騰、武家一同難儀なり、大工は大いに利潤を得

八一、嘉永三年四月二十七日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『御書留』嘉永庚戌』所収、（二ツ折〓折紙、とあり）、同前

謹而拙書拝呈仕候、薄暑相加候御坐候処、先以閣下倍被為揃、御勝常被為涉候御儀、恐賀無量、萬福奉南山候、入梅前故欺、兎角不順之候ニ御坐候得共、近日兼而之御臂痛憂動も不被為在候御儀候哉、御容体奉伺度、如此御坐候、恐惶謹言

初夏念七

伊達遠江守

水府明公閣下

侍史中拝呈

敬白、時下不揃之候、為天下乍憚御保練被為在度奉折候、其後ハ御契潤奉申上、恐入奉存候、私儀も過る七日出府仕、^①一昨日参觀御礼首尾能奉申上、重畳難有仕合ニ存候、随而例之鹿産持越候ニ付、乍恐進呈仕候、御叱留被成下候ハ、難有奉存候、甘鯛ハ是向暑定而風味も不宜候儀と奉恐入候、尚又後期萬々可奉申上候、恐惶不備百拜

① 伊達宗城、三月三日宇和島発、出府、四月七日江戸着、四月二十五日参勤御礼登城

内容 一、斉昭の臂痛への見舞い、

一、領国産の鹿産を呈上、甘鯛は、気候柄風味よろしからざるや

八二 嘉永三年四月二十八日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

*『(御書留) 嘉永庚戌』所収、同前

御出府之由にて、御書状入御念候、先は御無異、令抔躍候、特に名産御附贈、不堪感荷之至、勿々希謝如此候也

四月廿八日上ル

水隠

伊達殿

奉復

内容 一、「八一」宗城書翰への返書、土産への礼

八三、嘉永三年六月二十三日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『(御書留) 嘉永庚戌』所収、同前

謹而拙贖拜呈仕候、酷暑甚敷御坐候所、先以 台下倍被為揃、御機嫌克、雖毒熱中聊不被為有御異例候条、乍憚恐賀南山之至ニ奉萬寿候、爾後ハ不奉伺御動静、不罪々々御海量奉希候、先便少々御服氣為被為在候と存候所、当今暑熱ニ而如何被為在候哉相同度、弊藩之龜両種、乍薄微当季奉伺御機嫌度、進献仕候、御叱留被成候ハ、難有仕合ニ奉存候、将亦、兼而恩借被成下候玉海書写仕候故、奉返納候、其内如何間違候哉、自十九卷至廿三卷五冊不足仕候故、甚御手数窃相願、奉恐入候得共、御序ニ相借被仰付度、先草略恐惶頓首謹言

六月念三

伊達遠江守

実名花押

水府賢明老公閣下

呈侍史中

徳川斉昭と伊達宗城(出)——河内

①「玉海」Ⅱ宋王忠麟編、第十四号「五三」註⑤、及び「五四」の二通に、宗城の「玉海」借用の記事がある

内容 一、領国産の産品二種呈上

一、借用の「玉海」、書写済み、返納す。但、第十九より二十三の五冊は不足なりし故、重ねて借用方を依頼

八四、嘉永三年六月二十三日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『事修叢書 九下』所収、但し、同前

(1)

以密啓奏告仕候、本書にも如申上、毒熱之候御坐候処、先以閣下倍被為揃御機嫌克被為在、聊御申分も不被成御坐、御多祥可被為涉、萬福恐賀無量奉存候、先頃中ハ御眼疾に被為在候由、追日御清快トハ奉存候得共、暑熱之時ハ別而不勝之もの故、何分御保練被為在候様、伏而奉希候、尚又御容躰奉伺度、其後ハ御契濶申上、重畳恐縮多罪之至奉存候、何分御海量奉願候、先達ハ御委曲之御書下頂戴仕、難有奉盟誑候、乍恐事済候儀ハ、最早奉復不申上候一、幸公へ於宮云々、密奏之儀ハ、除かん迄ハ黙々仕候方可然旨蒙 御教示、^①乍残念差控候様可仕候、何を申候而ハ畢竟ハ丸薬ニ而差支、切齒憤歎無止御儀と奉存候

一、先達甘鯛進献仕候、少々思召被為違候儀被仰候処、未 八郎君より御礼ニ而御高吟被差上候ニ付、拝吟可仕旨ニて被相下、重畳恐入候、尊書ニ而却而当惑の至奉存候、右詩作ハ、不苦候ハ、拝領被仰度奉願候

一、何そ有益書籍御手に被為入候ハ、拝見可被 仰付候間、何そ所蔵仕候ハ、差上候様奉知承候、何分裨益之書も無御坐、其内砲台製造、鉄炮鑄造坏之訳書ハ、追々出来仕、当時浄写中故、不遠呈覧可仕と奉存候、西洋風之大小軍艦製造書、何分手に入不申、よふく七種軍艦製造書位之儀に付、右之類書何卒密々拝見奉希上度、原本ニ而も

宜敷御坐候、席堂より御免被仰出候迄相待居候而ハ、急速造立工面も難相附候得ハ、平時探索ハ仕置度奉存候、此儀ハ伏而奉渴望候、○いまた夷舶出沒之巷説も伝承不仕、松前へハ三十余名上陸仕候由、又々廻崎可相成と申事に御坐候

一、此頃於弊藩、極々三味共精製ニ仕候合葉と、硝石中製ニ而製候葉と、葉力為相試候得ハ、中製之方余程勝り、丁着宜敷、錯中よこれ少く御坐候由、畢竟精製仕候而、余り塩気ぬけ過候故にも可有御坐、不可解儀と奉存候、精製程宜敷可有御坐と存罷在候処、意外之儀に奉存候、御高論御教示奉希上度

一、近頃卒忽之申上ニ而恐入候得共、不苦御儀ニ御坐候ハ、此蘆葉二枚へ 聖公と大夫人君之御詠御染筆被成下儀ハ相成間敷、兼々奉願奉存居候ニ付、極御内々相伺上候、尤密々重宝に仕置度奉存候故、不顧前後奉願上候、唐突之罪萬死云々奉存候ハ、御内々御委曲通り御機嫌奉伺度、別副密呈仕候、恐々謹言

六月念三

再敬白、何大炎暑中、乍憚 尊躰御保護被為在度奉希上候、華境辺も順候、秋作豊熟仕候半と奉遙察候、当今大坂杯ハ米価又々騰貴、一俵銀三十七錢余ニ御座候趣、何卒一統豊稔仕度事に奉存候、何も冗長之愚文差上候も、御眼疾中奉恐入候間、極要耳奉申上候、恐々頓首

宗城百拜

水府聖明公閣下

- ① 幸公ニ藩主中納言慶篤。前年嘉永二年四月以来の、藩内「奸派」処分問題での、阿部老中と斉昭とのやりとりが未だ続く
② 八郎君ニ斉昭八男、昭融、天保十年生、安政元年八月、川越松平家松平典則養子、松平誠丸、大和守、直候
内容 一、斉昭の眼疾への見舞

一、水戸藩主徳川慶篤への幕府指示は、かんニ「奸派」排除（本回の冒頭に述べた、興津・内藤の「外転」のこと）の猶予

であり残念なり

- 一、甘鯛進献に対し、八郎麿（昭融）より詩作を贈らるとの由、恐縮の至なり
- 一、有益の書、入手あらば借覧いたしたし
- 一、砲台製造（高野長英訳書のことか）、鉄炮製造等の訳書、遠からず呈覽せん
- 一、西洋風大小軍艦製造書の類を拝見いたしたし
- 一、異国船出没のうわさあり、松前へ三〇余名上陸とか、又々長崎へ廻り来るか
- 一、宇和島藩にて硝石中製法試験中なり、御高論を教示されたし
- 一、斉昭と夫人の詠歌染筆の色紙を依頼
- 一、大坂物価騰貴、「一俵銀三十七銭余」とか

(2) 別紙

副啓奉申上候、与風此雷火銃訳出来ニ付、奉呈覽候、御写取に相成候ハ、御返却奉希上候、最早御手元へ上り候程も難計候得共、先々指出申候、恐惶頓首

六月廿三日

内容 一、「雷火銃」訳書出来、呈覽に供す。写取りの上、返却されたし

八五、嘉永三年六月二十四日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

*『(御書留) 嘉永庚戌』所収、同前

再敬白、時節柄御坐候得共、乍憚為天下尊体御保練被為在度奉祈候、恐惶觀啓
唯今者不存寄被投尊翰、恐入奉謹誦候、御教命之通、酷暑節御坐候処、先以閣下被為揃倍御勝常被為入候旨、恐賀無量奉南山候、然者当季蒙御尋、殊に燕鷺二翼御恵投被成下、恐入難有仕合千萬、感荷之至ニ奉存候、乍不珍弊邑勝

男武士一箱、御請御礼奉申上候驗迄、進獻仕候、御毒熱中御服氣被為厭候様奉願上候、先ハ不取敢即御請奉申上度、如此御坐候、恐惶頓首欽言

六月廿四

伊達遠江守

実名花押

聖明公閣下

侍史中御請

御端書難有奉存候、乍去此時候ニ御坐候へ共、尊体被為厭度奉存候、愚僕も伏旧瓦全碌々罷在候故、乍恐御放慮奉願、恐惶不宜

内容 一、燕・鷺二羽惠贈への謝礼

一、領國産の勝男武士（かつおぶし）呈上

八六、嘉永三年七月 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

* 『御書留』嘉永庚戌』所収、同前

前月二十三・四之両書誦読候、先々暑中御無事之由、令抔躍候、殊に御國産之品々着受用、此薄酒聊好意相服候也

七月——六月晦上ル

水戸

伊達遠江守殿

尚々、残暑厭専一候、拙生服氣よき方ニ趣き申候、御降心可給候、玉海之儀縷々入御念候、即御残之分御返し申候、已上

内容 一、六月二十三・二十四日兩日の宗城書翰（「八四」・「八五」）への斉昭返書、礼状

徳川斉昭と伊達宗城（徳）——河内

八七、(参考書翰) 嘉永三年七月十六日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

* 『(御書留) 嘉永庚戌』所収、同前

以愚翰奉謹呈候、残暑之節先以 閣下益御機嫌能被成御座、乍憚恐悅奉存候、其後ハ彼是取紛不相伺 御容体、恐縮仕候、然者不礼至極ニ候得共、弊邑之疎品、御安否奉窺候寸志迄ニ奉謹呈候、御一笑被成下候得者、本懷之至難有奉存候、先者奉窺 御容体度、奉捧愚札候、恐惶頓首謹言

新秋十六日

二伸、別而残暑甚敷、御自愛專要乍恐奉存候、如只今御坐候得者、萬心ニも可然奉存候、如先日不順ニ而ハ折角当秋収不安心奉存候、頓首謹上

閣下謹呈

藤 宗 紀

内容 一、領國産の食品を呈上

一、氣候不順で秋作不安なり

八八、嘉永三年七月十六日 徳川斉昭書翰、伊達宗紀宛

* 『(御書留) 嘉永庚戌』所収、同前

為時候御尋、華翰并佳品御投惠、芳意不淺存候、先々御平安欣賀之至、草々希服加此候也

初秋既望

水 戸

伊豫入道殿

希服

尚々、不均之氣候ニ候処、如教、近日之様子ニ而者秋取も可也可有之、隨時御厭專一と存候、不

内容 一、書状への礼

一、不順の氣候なるも、近日回復、秋取もかなりならん

八九、嘉永三年七月廿日 徳川斉昭・伊達宗城往復和歌

*『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

(1) 烈公(徳川斉昭)、遠江守(伊達宗城)へ御遣しの御歌

寄山述懷

晴くもり 空にまかせむ 聳たる ふしの高根の 動きなければ

定めなき 世の風なれハ 晴ぬとも またくもらん 小筑波のミね

人しらす くもるとみしも あさま山 もえて 物おもふ あかきころを

燈下乱筆、御推読後、直ニ御火中

(2) 伊達宗城、徳川斉昭へ返答贈歌

密啓拜上御秀詠、難有奉盥吟候、不覚感激奉涙襟候、御返しにハなくと、不顧恥かくなむ

つくはねの 峰の神風 おろし来て ふきこそ はらへ 四方の 浮雲

浮雲の はるゝにつけて いとはやく 仰まほしき 富士の 高ねを

御一笑之末、御丙丁奉希上候

徳川斉昭と伊達宗城(比)——河内

九〇、嘉永三年七月 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

* 宇和島伊達文化保存会所蔵、伊達家文書原本、『御重書目録「乙」〔御書翰類〕』、状

同右所蔵稿本『御書翰類 第一卷』所収

〔斜封紙ウ書〕

「書附

（封印）

（端裏書）

「（伊達宗城筆）

景山異説

（後筆）嘉三、七月

御別紙令披閱候、硝石中製と精製と合葉ニ被成、御試之處、中製ハ丁差も宜敷、畢竟精製ニ過、塩気ぬけ過候故ニも可有之哉、精製程宜敷義ハ有之間敷候所、御解兼被成候故、拙老へ御尋被成候との趣、何も承り申候、追々砲術指南致候程の人ニも解兼候半故、貴先方ハ御尤の事ニ御座候、一体硝石と塩とハ縁有之者故、何程精製かよろしきとても、其度を過候てハ不宜候、且精製ニ過候へハ品も小さく相成申候、乍然再煮位の処ハ至極宜しく候故、再煮位の処を精製とハ可申候、塩気多候てハ常ニしめり勝なる物ニて、夜中扨ニハ尚不宜候へハ、水晶の如く相成候品を上品とハ可申候、扨丁差云々の義ハ、精製と塩気多とにてハ精製ニこし候義ハ無之候へ共、是ハ第一ニ灰つまると灰のびとニ有之候、其故ハ、三五玉の新筒ニて、火門江灰つまりの葉を一分入、此入レ様、中央へ入ル様ニして玉も不堅、ゆるからず込べし、三五間の処ニて戸板を打時ハ貫く、又十五間計ニて打時ハ不貫、又灰のびの葉ニて、三五五間ニて打時ハ^{（マ）}葉ノ^{（マ）}方等前ニ同し込不貫、又十五間計にて打時ハ貫く也、是ニよりて近くを打ニハ灰つまりをよしとし、遠きを打ニハ灰のびをよしと、我等神発流ニてハ教事也、つぶ手にても知らるべし、遠へ飛出也、灰のびハ押也、乍然、灰つまりハ物を貫ニ烈なる故、筒へも障るか故ニ、大筒ニて葉多込るニハ、必灰のびを可

用事也、小筒杯ニて当る為ニハ、灰のびの薬ハ、玉送り遅き故ニ当リニとくくなり、貫ニハ灰つまりの方得也、西洋人ハ未此等ニ不心付 歟論しを不聞 あらまし右之通り故、是等ニて御解可被成と、余ハ文略致候

一、艦之義御尋之处、拙考に舟ニもせよ、艦ニもせよ、船の名は本鮒より出たる者成べし、釈名等ニハ、是彼有れ共、今ハ拙が異説を以て述る、五十連音ナと子と通ス、又舟をふなともいふ、船着杯いふ類也、必鮒ニかきりたる事ニハあらざれ共、鮒其頭堅ハ、物ニ触てハ川魚ニて、第一賞る物故なるへし、鮒ニ類せる魚の形なれハ、海川をいはず、皆船の手本とハ成べし、もよき為也、胴之处太く、尾の方細く、槍ニもせよ、矢の根ニもせよ、何品ニても、先細くして、元の方太きハ通り悪しく、先太くして、元の方細きハ通りよろしく、されバ船ニても同断也、其あばら骨の間ハ、又あばら一本入程ツ、の透有る也、擬鮒ハ浮か持前ニて、沈むハひれを以て水をかく故ニ沈む也、故ニつかるゝ時ハ、さかさニ成て浮む也、鮒ニハかきらぬ事也、何魚も同じ 其さかさニ成て浮む処が、則船と成べき形也、如左

(い)ここに図1あり、説明文を(1)~(4)に対応させて示す。さらに、続く文中に小図三ヶ(図a・b・c)あり)

(1) 鱧

(2) 此筋より上を切捨たるか、則船の形ニして、良船の形也

(3) (捨) 舍ル

(4) 水かき也、・カイはカキ也、□□イとキと音通ス、日本ニてハ尾ニ習ひて鱧を押方多く、カイ 權を用るハ少シ、西洋ニて

ハ水かきニ習ふか故ニ、引權多し、ろを押事は少シ

(5) 盤

(6) 此穴ハクサリ又ハヒモヲ通ス穴也、是ハ横木を打折レし時ノ用心也

(7) 此横木ハ如此内へ取、車仕かけニして、易く動く様ニもし、又ハ邪摩ニ不相成様、外の方へも必ず理合同断也

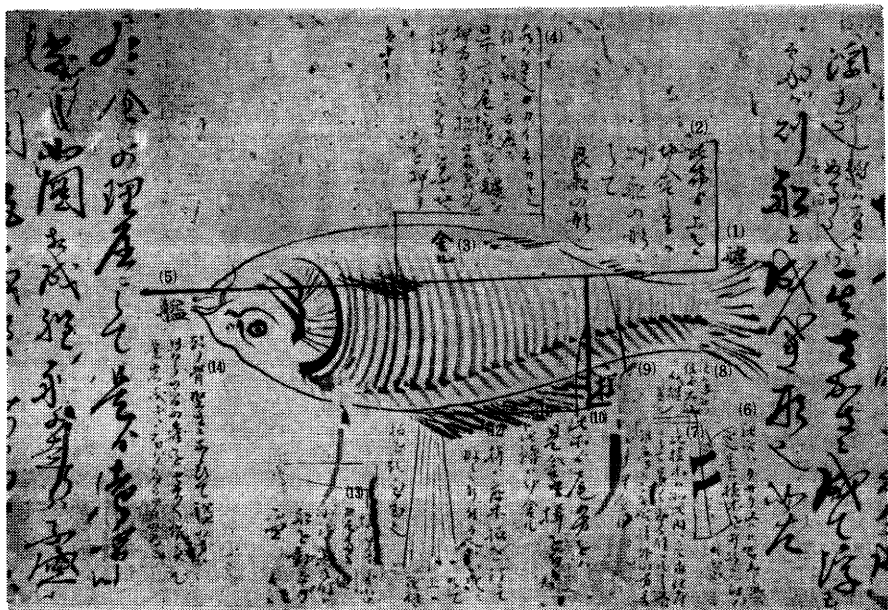


図 1

- (8) 此かね五ツ位より、大船ニ成程多シ
 - (9) 楫
 - (10) 此所より尾の方を見捨て、楫を付る也
 - (11) 此鰭ハ切捨ル
 - (12) 楫ハ薄木板を釘ニて段々ニ打付る也、如此ニして上へ化粧二板を張包む也
 - (13) 楫ヲ下より小口見たる図、如此無之時ハ、船を動ス事不宜
 - (14) 頭ノ骨堅キニならひて、鰓の方へあはらの間の透をせまく作るへし、是岩磯等江当りたる節の為也
- 右ハ全くの理屈ニして、是より考可申候者、(小図a) 如图相成程船の走りハ不宜、(小図b) 如图丸く成程走りハ宜し、

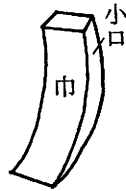
小図 a



小図 b



小図 c



是川船と海船との相違也、丸く成程船ハ浮也、川船の體ニてこくハ(小図a)如此成たる方走る也、海船の帆ニて走らするハ、丸く成たる方走りよし、帆ニてやるハ早く、いはすべしする也、川船の體ニてこくハ水を押切故也

一、西洋の艦とても、右鮚と同断、たとへば、あばらの小口四寸の木ならバ、巾ハ

八寸有也、(小図c) あばらの間の透ハ、又小口同様ニ四寸也、但、あばらの小口

透も亦六寸ニてよし、左 扱又船板は厚サナリ四寸ニてよし、内外より四寸の板を

打付る也、但し、外より打釘ハ、あばらを貫て、内の方ニて打

一、船板四寸ニして、あばらの厚ミ巾八寸有る者ハ、たとへハ今四寸の木へ、同じ

厚サの四寸の木を打付て、はがす時ハ、釘抜る也、四寸の厚サ有る木へ、四五分

の厚サ有る木を打付て、はがす時ハ、四五分の木ハ折れ共、釘ハ不拔道理故、あばら厚くして船板の薄き方、持よ

き故也、西洋の船ハ、釘の打方悪し、一統て西洋人ハ、初の考付

一、是迄 本朝の船ハ以板タメテ船ニ作ル物ニて、本直なる板なれハや々もすれハ開く也、西洋の船ハ角物を以、

本より船ニ作る故、開く憂なし、板を以て船ニ作ると、本より船ニ作るとの相違あり

一、本朝の船ハ、板を以作る故ニ大財ニ無之テハ不能事也、西洋の船ハ極大船ニても、二間三間の角物を、段々ニ打

付て作る故に、山よりの運送も易く、船も丈夫ニ出来る事也、上へえ打ハ化粧板也

一、西洋流の船造、あらまし如此

(ここに図2・3あり、説明文(15)~(24)及び(27)~(30)、前に同じ)

(さらに、次の文中に中形の図三ヶ(図d・e・f)あり、その説明文(31)~(33)、前に同じ)

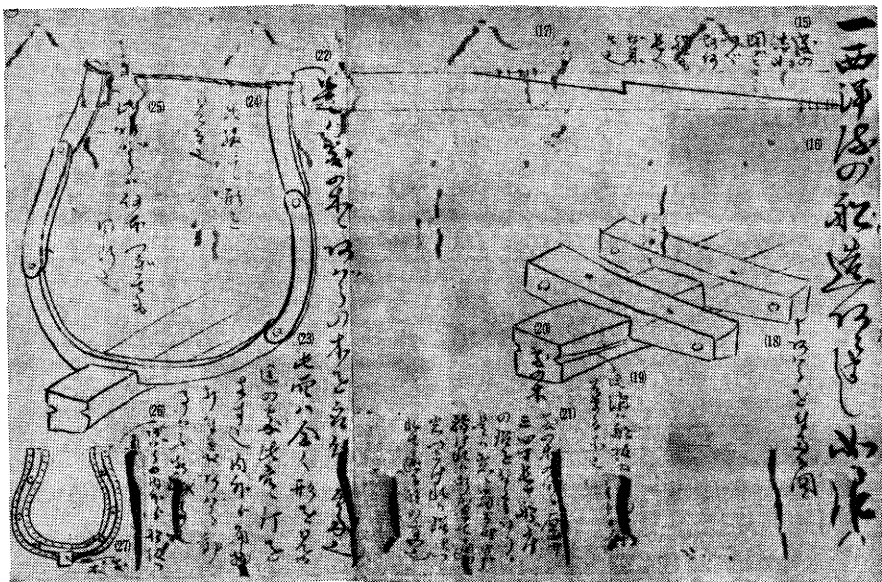


図 2

- (15) 敷の木、如图二つぐ故、何程も長く出来候也
 - (16) 釘也
 - (17) 釘也
 - (18) あはらを付たる図
 - (19) 此溝ハ、船板の角物の末はまる木也
 - (20) 敷の木
 - (21) 敷の木の下の、厚サ三四寸、長サ船だけの鉛を付くるあり、是ハ岩へ当る時、岩弱けれハ折かきて通り、岩つよけれハ鉛けづれて通る様の工夫也
 - (22) 是ハ、敷の木へあばらの木を取付る処也
 - (23) 此穴ハ、全く形を見る迄の処、此穴へ釘をさす也
 - (24) 内外より角物打付る故、あばら動事ハ不相成事也
 - (25) 此繩ニて形を見る也
 - (26) 此あばらハ、何本つぎても同断也
 - (27) あばらの内外より船板ヲ打付たる図也
- 敷ノ木
- 一、船の形ハ則耐を切たるが如く、(図d) 如此ニ無
 之てハ走り不宜、

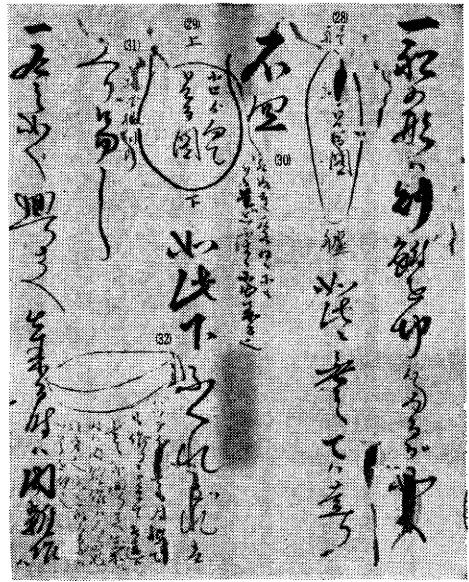


図 3

(図 e) 如此下ふくれざれば走り易し(図 f)

図 d (28) 艫——上より見る図——艫

図 e (29) 上——小口より向て見る図——下

(30) 水ぬき、左右何ヶ所も付る、是ハ思ふまゝに出来る也

上板屋根同断

図 f (32) バツティラニても、大艦ニても、作りニさ

まで相違ハ無之、外廻りさへ出来ル時ハ、内雑作ハ、人々の好次第也、窓を明る処ハあハらを切也

一、右之如く、廻りさへ出来る時ハ、内雑作ハ如何様ニても人々の好次第也、二階ニも三階ニも、船の大サニより出来ぬべし

一、長サ・幅・深さ等、前文耐の形を本として、人々の好次第たるべし、走るニハ長き方よし、廻るには丸き方よし、艦とても、バツティラとても、製造ニさまで相違ハなし

右之外、面悟ニて御尋も候ハ、可申候へ共、病眼中の執筆、尽兼申候、尚文字誤り、落字も可有之候故、よろしく御推覧可給候

一、丈夫なる処のミ西洋を学び、製造して、一本帆ニいたし候てハ、船ハ重く、勝利無之ハ勿論ニ候、五本五本の帆柱ニも相成候位ニ無之候てハ、勝利ハ難得事ニ候、姑息ニて船ハ西洋を用、帆ハ是迄の御定の如く一ツと申ニて

ハ、あたち武士を皆殺ニさするといふものなり、かゝる姑息の振舞せんよりハ、まだも手薄き輕き船へ、一ツの帆を引上て、にげのび候方、まさると申候て可相成嘆敷事也、船さへ出来居たらハ、帆の義ハ時ニ臨ミて、三本柱、五本柱事也、何様帆柱ハ臨時何本ニても拵へたらハ出来可申候へ共、帆づなの扱が中々俄ニ出来る者ニハ無之候

御尋向ニ付、異説等認申候へ共、尚又鍋・黒・松越・薩州^{理修}・藤堂・真田等^①其外多の有志へ御問の上、是非の義ハ御定が可然候事

明論も有之候ハ、御教示可給、又有志の中よろしき考ニても御聞及候ハ、是亦承り申度候、此段御頼置申候

嘉永戊孟秋日

水戸隠士

伊達殿

希復

① 鍋^{理修} 鍋島齊正(直正、閑叟)、黒^{理修} 黒田斉博(島津重豪男)、松越^{理修} 松平越前守慶永、薩州^{理修} 松平修理大夫 島津斉彬、藤堂^{理修} 藤堂高猷、真田^{理修} 真田幸貫

内容 一、硝石精製法、「八四」への返事

一、それによる銃砲

一、軍艦船体の構造、船は耐なり、あばら、船板、船の形など

一、帆は一本帆より、三本柱・三本帆、五本柱・五本帆が良し

一、これらの説は、鍋島らにも意見を聞かれたし

なお、伊達宗城が斉昭に対して、彈藥製法等の伝授を求めていた件は、第十一号「八」(弘化三年八月二十一日)、第十二号「二四」(弘化四年七月二十六日、宗紀書翰)などをはじめとして、しきりに見える。

(嘉永三年分未完)

本稿は、「昭和五十三年五十四年度文部省科学研究費総合研究(A)」の成果の一部である。